

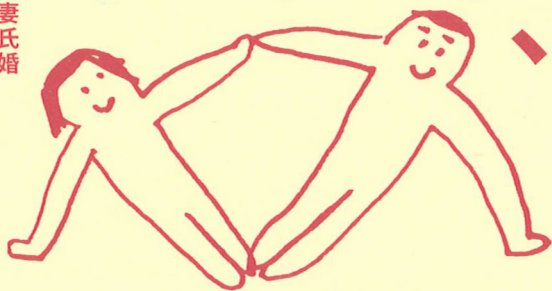
十 人 十 色 の つ が い 方

大塚 玲子

オトナ婚 わたし たちです、

こんな結婚、
アリなんだ！
快適なカタチだから
長続きする。

半同居婚
おめでた
事実婚
役割逆転婚
年の差婚
お見合い
婿入り婚
浮気容認婚
女×女婚
じゃんけん妻氏婚
etc.....



〈特別寄稿〉中村うさぎ

目次

結婚つて、なに？——この本を書くまでのいきさつ 11

第①部 カタチはなんでもいいじゃない 〈おもに事実婚〉 23

つがい ① しばざきとしえさん（40歳）

（半同居婚）

「相方に夕飯を出すときは、
一食1000円です」²⁴

Q いまの夫婦の形について、教えてもらえますか？ 24

Q この形にいたるまでの流れを聞かせてください 26

Q いまの形を選んだ理由と、この形のメリットを教えてください 37

Q しばぎさんにとって、彼はどんな存在でしょう？ 47

Q おたがいの親はどんな反応ですか？ 48

Q 失礼ですが、別に寝るといことは……、そういうほうは？ 50

Q おふたりの関係って、夫婦って、なんでしょう？ 51

Q これから結婚する人へのアドバイスはありますか？ 54

つがい ② 光本歩さん（22歳）

別居婚

「いっしょには住んでいないけど、
でも家族は家族です」 56

家族をだいいじにする人とわかって、交際をOK／きっかけはビザだけど、ほんとに好き／
やりたいことをやるための別居婚／子どもをもつときは、いっしょに住むと思うけど

つがい ③ 祝明子さん（47歳）

おめでた事実婚

「なんでも夫婦でって、
しなくていいのよ」 64

Q この形にいたるまでの流れを教えてくださいませんか？ 64

Q お父さんと仲がいいみたいですな？ 72

Q 祝さんも、お子さんと仲がよさそうですね？ 73

Q おふたりの役割分担は、どんな感じですか？ 76

Q 名前を変えないってことは、そんなに重要ですか？ 78

Q 事実婚にしていることで、デメリットはありますか？ 81

Q 自分たちの関係は、なんだと思いますか？ 82

Q これから夫婦をやる人にアドバイスするとしたら？ 84

つがい ④ 竹本さとみさん(40歳)

子連れ初婚

「結婚しないで産むってことに、
なんで反対するの？」 90

妊娠すれば「おめでとう」なのに、結婚しないと……／

ひとり親を、あえて人にすめはしない／名前なんて、ただの記号と思えばいい／

入籍は子どもの手が離れてから／女がひとりで子を産む選択

つがい ⑤ 小野緑さん(36歳)

女×女婚

「たがいの人生の協力者でありたい」

100

Q この形にいたるまでの流れを教えてくださいませんか？

100

Q おふたりの役割分担は、どんな感じですか？

113

Q 結婚式を挙げたそうですが、どうでしたか？

115

Q いまの形のメリットとデメリットはなんですか？

120

Q 実際に継母ステップマザーになってみて、どうでした？

123

Q 結婚って、なんだと思いますか？

125

Q これから「結婚」するかもしれない人に伝えたいことは？

130

*みなさまの声

別居婚派の言いぶん／アンチ別居婚派の言いぶん

62

法律婚の落とし穴

87

事実婚、ホントのところ

88

子どもをもたない理由

99

同性カップルにとっての結婚式

132

〈特別寄稿〉中村うさぎ たとえほかのオトコに恋しても 134

第②部 中身もなんでもいいじゃない 〈同居・法律婚〉 141

つがい ⑥ 森澤雅美さん(40歳)

役割逆転婚

「わたしがダンナを
囲っているところはあります」 142

Q この形にいたるまでの流れを教えてくださいませんか？ 142

Q 役割逆転した夫婦になるのに、影響を受けたものがありますか？ 153

Q こんなふうな、一般と違う形をとる難しさがありますか？ 159

Q ダンナさんにも嫁いでほしいと思うことはないですか？ 162

Q ご家族のみなさんは、この状況をどうとらえている？ 167

Q 夫婦の絆とか、結婚って、なんだと思いますか？

168

Q これから夫婦をやる人へのアドバイスは？

172

つがい ⑦ 村田奈緒さん（46歳）

年の差婚

「ハードルがありすぎて、
いちいちかまうてられなかつたんです」

176

手術後の彼女への、前夫の暴言／今回はたまたま年下だっただけ／
産めないおかげで、悩みがひとつ減った／「ほんとうの親子って、なに？」／
変えられないことで悩んでもしかたがない

つがい ⑧ 山本由布子さん（46歳）

お見合い婿入り婚

「相手に条件つけるんやったら、
恋愛結婚にこだわらんでも」

186

戸籍筆頭者は夫だけど、住まい方は「婿入り」／おたがいに感謝してるから／
見合いは「条件↓相性」の順だから話が早い／「恋愛」と「条件」の両方を求めるのは欲張り？

つがい 9 うえみあゆみさん(35歳)

浮気容認婚

「セックスきつかけで別れるなんて、ちっちゃくね？」 196

家族の気持ちを尊重して離婚を回避／再度の浮気バレに「もういいや」とも思ったが……／人からだいじなものを、せて奪わない人生／子どものためではなく、わたしのため／それで別れるなら、セックスでしかつながないってこと

つがい 10 奈良崎知子さん(33歳)

じゃんけん妻氏婚

『じゃんけんで苗字きめる?』って聞いたら『いいよ』って 212

「田中知子」は、ちょっとしよぼいと思った／

義母の反応は「姓名判断を見たら、大丈夫よ」／

「なぜ奥さんの苗字を？」と役所で聞かれ／会社の名刺やハンコが

「田中」になっていた／思いのほか新しい姓を気に入っているダンナさん

*みなさまの声

役割分担は適材適所 185

幸せって？ 194

夫婦とか結婚って、なんでしょう？ 195

浮気容認夫の言いぶん 207

セックスレスって、どうなのか 208

相手をなんと呼んでいますか？ 222

「左手薬指の指輪」してますか？ 224

「結婚的なこと」をしたい気持ち 227

勝手に縛られているわたしたち——取材を終えて 228

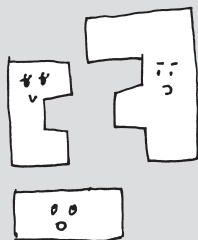
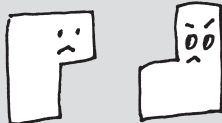
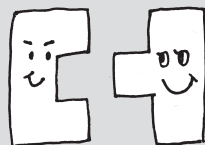
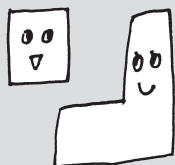
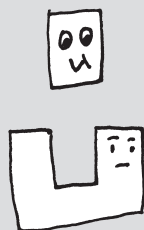
こ の 本 で の 言 葉 の 使 い 方 に つ い て

- この本に出てくる「結婚」という言葉の意味は、話す人によって、また文脈によって、異なります。狭義では「法律婚」や「入籍」を、広義では「つがうこと」を意味するものと思います。筆者自身は、どちらかというと、後者の意味で使っています。
- 筆者は「つがうこと」を「ふたりの人間が支えあって生きること」と、とらえています。
- 一般に、「婚姻届を出すこと」を「入籍」といいますが、実際は夫婦で新しく籍をつくるので、誰かの籍に「入る」わけではありません。また「婚姻届を出すこと」と「入籍」は、日本ではたまたま同じことを意味しますが、本来は別のことです（ほかの国では、婚姻制度はあっても戸籍制度がない）。ですが、この本でも便宜上、「婚姻届を出すこと」という意味で「入籍」という言葉を使っています。
- 「夫婦」という言葉は、「結婚しているふたり」という意味で使っています（同性カップルも含む）。「つがい」も同様です。
- 「主婦」と「主夫」は、「家事を担っている人」という意味で、「シュフ」という表記に統一しました。
- 書名にある「オトナ婚」という言葉は、「形にとらわれない結婚」という意味で使っています。（参考：読売新聞2012年7月連載記事「オトナ婚の幸せ」。ただし記事では「熟年世代の結婚」という意味で使われています。）

*——本書に登場する方の年齢は取材当時のものです（2010年秋～2012年夏に取材）。

第 ① 部

カタチはなんでも
いいじゃない



〈おもに事実婚〉

つがい ①しばざきとしえさん

半同居婚

「相方に夕飯を出すときは、
一食1000円です」



しばざきとしえさん（40）。相方さんとは事実婚で、籍は入れていない。それぞれ同じマンションの別の部屋に住んでいる。この形で暮らしはじめて、ほぼ10年。

扶養家族は、前夫とのあいだに生まれた娘（20）と、猫一匹。相方さんも、別の猫を飼っている。

著書『じつはウチ、フランス婚』（MMR）と『オトナ婚』（エンターブレイン）は、しばざきさん自身の半同居事実婚生活を描いたコミックエッセイ。

Q いまの夫婦の形について、教えてくださいますか？

別居というより「別寝」？

まず、婚姻届は出していないです。

同居はしていないんですが、別居とも言いがたい。相方は自営でデザイナーをやっている、同じマンションの上の階に住んでいるんですね。わたしも毎日そこで仕事してるんで、いっしょにいる時間がすごく長いんです。ご飯も、朝以外はいっしょに食べている。ふつうの夫婦と逆ですよ（笑）。

もし完全に別居してて、週末だけ会うような関係だったら、わたしは「いらないな」と思っちゃう。今日は寒いとか暑いとか、天気がいいとか悪いとか、どうでもいいことを、ちくいち言いあえるような距離じゃないと、わたしにとっては意味がないので。

だから、別居とはいえ、電車に乗らなきゃいけないような距離に住んでるのは、またぜんぜん事情は違うと思いますね。寝るとき以外はほとんどずっといっしょなので、別居っていうより「別寝」？（笑）。

洗濯や掃除は、それぞれでやっています。彼のほうの仕事場エリアは、わたしも使うんで掃除しますけど、彼の居住スペースはやらない。財布も別です。

相方は、料理はしきないですね。うちでわたしがつくった夕飯を食べるときは、一食

1000円もらってます（笑）。

同居でもないし、完全な別居でもない。そんなふたりの関係を、ここでは「半同居婚」と呼ばせてもらう。住まいも家計も別なので、稼ぎや家事の役割分担も存在しない。食事をつくるのはしばきさんの役割だけれど、「一食1000円」と有料なので、これも分担とはいいたい。面白いやり方だと感心する。

しばきさんとはもともと、わたしが『じつはウチ、フランス婚』を読んでファンになったことから知りあい、この取材をお願いした。色白でショートヘア、意志の強そうな大きな目。どこか、シャイさが漂う。女子高時代は、後輩にかなりモテていたらしい。

Q この形にいたるまでの流れを聞かせてください

父を立てようとする母の苦勞がすごかった

わたしはもともと結婚願望がぜんぜんなかったんです。だから「こんな夫婦がいいな」とか思ったことが1回もない。子どものころは、「たぶん結婚しないだろうなあ」と思っ

アンチ別居婚派の言いぶん

* 3年前に結婚したCさん(33)。別居婚には否定的。

「わたしにとっては、いっしょにご飯を食べる、っていうところが重要なんです。だから、いっしょに住まないっていうのは意味がなくなっちゃう」

* つがい③子連れ初婚の竹本さん(40)も、アンチ別居婚派。

「わざと別々に暮らしてるよ、だけど籍はいっしょだよっていうのは、やっぱり稀なケースですよ。だって家賃は2倍かかってるし『非効率的だな』とは思わないです」

わたしの印象では、事実婚をしている人は、わりあいアンチ別居婚派が多いように感じられた。逆に別居婚の人は、入籍にあまり躊躇(ちゅうちう)がなさそう。

一見反対のことをしているようだけれど、でもじつは、別居婚の人も事実婚の人も、関係を永続させる(ような気にさせてくれる)「なにか」を求めているという点では、同じではないだろうか。事実婚の人は同居に、別居婚の人は入籍に、その「なにか」を求めるのではないか。





法律婚の落とし穴

*子連れ事実再婚経験者のKさん(39)。

「結婚(法律婚)とか同棲って、『一生この人といられる』とか『永遠に夫婦でいられる』って錯覚するところがありますよね。でももしかしたら、(同棲を解消した)いまのほうで、気持ちはずながつてるかもしれない。逆に、入籍や同棲をしたことによって別れざるをえなくなったり、マイナスに働いてしまうこともある。その状態にあらをかいちゃうから、命を縮めるんですかね。」

ほんとうの夫婦の関係って、相手の気持ちを思いやるとか、いっしょに生きていきたいっていう努力の部分ですよね。結婚とか同棲とか、名前がつくものじゃない。日々いい関係を続けているからこそ、明日もいい関係なわけで、保証はないんですよね」

*つがい⑨浮気容認婚のうえみさん(35)。

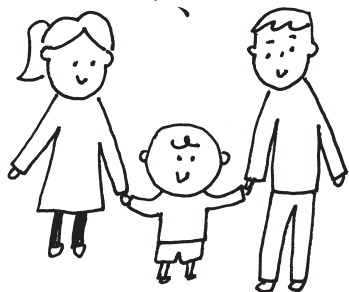
「夫婦なんてほんとうは、うつすゝいオブラートみたいな、ちょっとなめたら破れちゃうようなものに包まれてるんです。籍が入ってるからって、そんなことは関係ない。本来はただの人間関係であって、意志をもって努力した結果、やっと成り立ってるもの。なにも努力せずに、そこに立ち位置があるなんて思っちゃいけない。」

結婚したら『妻』になれるわけじゃないし、『夫』も同じ。その人が努力した結果としてそのポジションがある、ってわたしは考えますね。だから成績表だったら欲しい。『このふたりは夫婦となるべくして努力をした。よって夫婦として認めます』みたいなね」

つがい ④ 竹本さとみさん

子連れ初婚

「結婚しないで産むってことに、
なんで反対するの?」



「子連れ結婚」というと、離婚や死別をしたひとり親が新しいパートナーとつがう「子連れ再婚」を思い浮かべやすいが、最近は「子連れ初婚」をする人も増えている。結婚せず、独身のまま子どもをもった女性が、新しいパートナーとつがうケースだ。

現在、息子（14）と彼と3人で同居生活を送る竹本さとみさん（仮名・40）も、子連れ初婚をしているひとりだ。彼女は十数年前に非婚で子どもをもち、3年半ほどまえから、現在のパートナーとつきあいはじめた。彼も婚姻歴はなく、彼女と同一年だそうだ。

「いつからいっしょに住んでるかは、よくわからないんですよ。つきあいはじめてから、ちよつとずつ彼がうちにいる時間が長くなってきたんです（笑）」

竹本さんとは、ツイッターをとおして知りあった。言葉を交わすようになって、たまた

ま彼女が子連れ初婚をしていることを知り、取材をお願いしたのだ。この本の取材では、そんなふうに、ツイッターで自然と友だちになった人に話を聞かせてもらったことが何度かあった。ありがたいことだ。

実際に竹本さんと会ったとき、じつはかなり驚いた。ツイートやメールの文面から、とても背の高い、ちょっとこわそうな女性を勝手にイメージしていたのだが、実物は小柄で愛想のよい、かわいらしい雰囲気の人だったのだ。

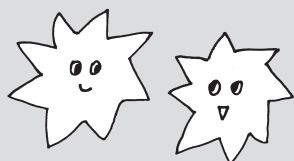
妊娠すれば「おめでどう」なのに、結婚しないと……

竹本さんはなぜ、結婚せずに子どもをもったのか？ まずそのことを、たずねてみた。

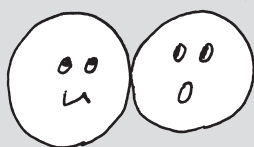
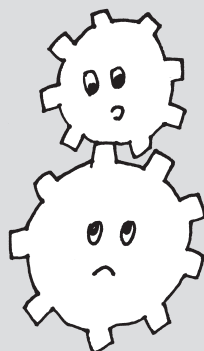
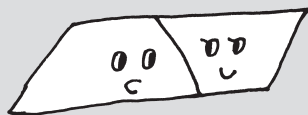
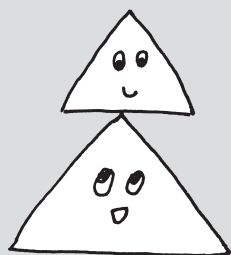
「わたしは単純に、妊娠したから子どもを産んだだけのこと。そのときに結婚してなかったと、ただそれだけなんです。

結婚してないで産むっていうことに対して、なんでみんな反対するんだろう？ っていうのはすごく思いましたし、いまもずっと思ってます。妊娠すると『おめでどう』って言われて、そこに結婚がつけば『よかったね』という言い方をされる。なのに『結婚しない』って言ったとたんに、みんな手のひらを返したような態度をとる。それはなんでなん

第 2 部



中身もなんでも
いいじゃない

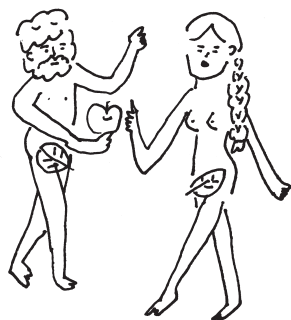


〈同居・法律婚〉

つがい ⑨ うえみあゆみさん

浮気容認婚

「セックスきつかけで別れるなんて、
ちつちやくね?」



一見「ふつうの」夫婦である。彼女はダンナさんと入籍しているし、同居もしている。小学生の子どもがふたりいて、夏休みにはみんなで旅行に出かけたりもする。どこにでもいそうな家族だ。

けれど話を聞けば、誰もが「えっ」と驚くだろう。「そんな結婚がアリなのか?」と。

漫画家・うえみあゆみさん(35)。ダンナさんの浮気が発覚し、一時は離婚を決意したものの、その後新たな夫婦関係を築きあげ、結婚を続ける選択をした。その経緯は、彼女のコミックエッセイ『カマかけたらクロでした』(メディアファクトリー)に詳しい。

しかも、その後もダンナさんの浮気は続いているという。

なぜうえみさんは、そんなダンナさんとの結婚を続けているのだろうか?

女性が離婚できない理由として昔からよく聞くのは、「経済的な事情（離婚すると生活できない）」だが、うえみさんの場合「それはない」という。彼女にも稼ぎはあるし、実家も都内にある。子連れで離婚したとしても、どうにもならないわけではないだろう。

だったらなぜ、離婚しないのか？ わたしが彼女のような状況におかれたら、おそらくとっくの昔に離婚していると思うのだが、それをしない、あるいは、それをせずにいられるというのは、どういうことなのか。それを、聞いてみたいと思った。

家族の気持ちを尊重して離婚を回避

はじめに『カマかけたらクロでした』に描かれている、彼女のダンナさんの、最初の浮気騒動について、大まかに説明しておきたい。

数年前、うえみさんが2人目の子どもを妊娠していたときのこと。夫は毎日仕事で忙しく、めったに家に帰らない。そんなある日、彼女は夫の浮気に勘づいてしまう。証拠とネタ（嘘）を織り交ぜつつ、彼女は次々と夫に「カマ」をかけ、そして夫はついに浮気を認める。「クロ」だった。

つがい ⑩ 奈良崎知子さん

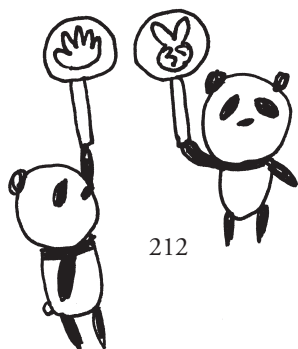
じゃんけん妻氏婚

『じゃんけんで苗字きめる?』って
聞いたら『いいよ』って

「結婚するとき、じゃんけんで女の人のほうの苗字にした友だちがいるよ」

そんな話を友人から聞いたのは、この本がだいぶ完成に近づいたころだった。もう原稿をまとめてしまいたかったけれど、この話だけは「聞かないわけにはいかない」と思った。
「妻氏婚^{つまうしこん}」の人に話を聞きたかったし、しかも「じゃんけん」で決めたというのは、なんとも面白そうだ。さっそく紹介してもらうことにした。

東京近郊に住む、奈良崎知子さん(33)。もともととはダンナさん(34)のブログのファンだったそうだ。つきあいはじめてすぐに結婚の話になり、それから1年足らずで入籍。その約半年後に、挙式した。ほどなく妊娠して、現在は育休中だという。赤ちゃんは生後9か月になったところだ。



取材のとき、ダンナさんもいつしよに来るかもしれない、と聞いていたのだが、待ちあわせ場所に現れたのは、奈良崎さんひとりだった。赤ちゃんが「ご機嫌ナナメ」だったので、ダンナさんが家で面倒をみることになったという。

ほっそりとした身体に、大きく、楽しそうな目。もらった名刺には、カラフルな色で、小鹿のイラストが添えてある。本人のイメージそのままだ。

奈良崎さんは、彼のことを「ダンナさん」と呼ぶ。ダンナさん本人と話すときは「猫くん」と呼ぶのが、最近のブームだそう。ダンナさんは奈良崎さんのことを「猫さん」と呼ぶのだという。やはりユニークな夫婦だ。

「田中知子」は、ちょっとしょぼいと思った

どうして、じゃけんで苗字を選ぶことになったのだろうか？ 奈良崎さんの答えは端的だった。「相手が、田中だったから」だという。

「わたし、苗字が『奈良崎』っていうんですけど、あんまりないんですね。名前は『知子』って地味なんですけど、『奈良崎』がちよっと派手だから、ちょうどいい。

でも、ダンナさんの苗字は『田中』。『田中知子って……』って思ったんですよ（笑）。

それは、わたしのキャラじゃない。ダンナさんは『信太郎』だから『田中』でもいいですけど、『田中知子』って、ちょっとしよぶくない?』って話になったんです（笑）

つがい③で紹介した、おめでた事実婚の祝さんも、まさに同じことを言っていた。名前が「明子」だから、「山田さん」や「佐藤さん」とは結婚できないと思っていたことを、申し訳なさそうに話してくれた。

祝さんの話を聞いたとき、「こんな人、ほかにはいないだろう」と思って爆笑したもののだが、いや意外と、下の名前がシンプルなために、結婚相手の苗字で悩む女性は、世の中に多く存在するのだろうか。

「そしたらダンナさんが『ぼくが（苗字を）変えてもいいよ』って言うてくれたんです。苗字が変わると、銀行とか手続きにいかなきゃいけないですけど、そういうのも、『ぼく』のほうが平日に休みをとりやすいから』って。あと、ダンナさんの仕事のほうが、外部との接触が少ないので、苗字を変えても影響ににくいっていうのもありました」

マーチャンダイザーとして忙しく働き、つねに社外の人たちと接する奈良崎さんにとって、そんな彼の申し出はありがたいものだった。とはいえ、「そんな理由で苗字を変えていいのか!」とも思ったという。

「左手薬指の指輪」してますか？

* つがい **⑤** 女×女婚の小野さん (36)。

「式のときに交換したのを、してます。相手のイニシャルと、式の日付が刻印してある」

* つがい **⑥** 役割逆転婚の森澤さん (40)。

「ダンナは金属アレルギーがひどくて、いまはしてません。ギター弾いたり、料理したりするときに、いちいち邪魔だとも言ってます。私は（左手の薬指に）してます」

* つがい **⑨** 浮気容認婚のうえみさん (35)。

「指輪？ してませんよ。式もしてないし、指輪もない。うちの姉も親も指輪してないし、まわりの友だちもほとんどしてないです。してる人、います？」

* つがい **①** 半別居婚のしばきさん (40)。

「指輪という単語が脳に浮かんだこともない

です、ふたりとも。わたしはパートナーシップをモノに象徴させるのって、うす気味悪いなあと思いますし、指輪自体が好きじゃないです」

* つがい **④** 子連れ初婚の竹本さん (40)。

「指輪はあります。してないときもあるし、してるときもある」

* つがい **⑧** お見合い婚入り婚の山本さん (46)。

「指輪はねえ、主人は仕事柄、機械とかいじるんで、できないんです。わたしは結婚指輪なくしたんですよ。3人目を出産してすぐくらいやったかな、指がやせて抜けて、なくなっちゃったんですよ。だから10年くらいずっとつけてないです」

* つがい③おめでた事実婚の祝さん(47)。

「結婚指輪とかないもん。わたしもあげてないし。式もしてない。なんの契りも交わしてません」

* つがい⑦年の差婚の村田さん(46)。

「してまず、自然に。おたがいに、なんのこだわりもないです」

* つがい⑩じゃんけん妻氏婚の奈良崎さん(33)。

「ふたりともふつうに、(左手の薬指に)してまず」

* 事実婚10年目のNさん(38)。

「指輪はね、ないです、買ってもらってもいいし。わたしはもともと手に汗をかく人なので、あまり好きじゃないですし。それに、

もし指輪をしたとしたら、それは誰に対して

の誠実なんだろう? っていう気持ちもある。うちの同居人にとっては、そんなこと(Nさんに自分というパートナーがいること)を他人に知ってもらっても(意味がない)って思うんじゃないかな。でも思うのかなあ、考えたことなかったですね。難しいなあ」

* 事実婚同居を解消したKさん(39)。

「指輪は、右手の人差し指と、左手の小指につけてまず。わたし、左手の薬指の指輪とか、いらないもん。自分がしたいところにするだけ(笑)。いま身につけてるアクセサリーはすべて、彼からいただいたものですけど、それが絶対『ここじゃなきゃいけない』とかないじゃないですか?」

わたしが「薬指に指輪がないと、他人から

「結婚的なこと」をしたい気持ち

一般に「結婚」というと、入籍や式を挙げることで、いっしょに住むこと、おそろいの指輪をすることなどをイメージする人が多い。それらは、どんな意味をもつのだろう？

ふつう「愛があるから」、そういったことをすると考えられている。でもほんとうは、むしろ「愛」というものが不確かだから、それが必要になるのかもしれない。

本来はべつに、なにもしなくていいのだ。ふたりの関係におたがいが確信をもって、ただつながっていければいいわけで、それは式や入籍、同居、指輪なしでも可能なことだ。

けれど、ふたりの関係というのは、目に見えない不確かなものだから、なにかしらの形

にしたくなる。それが、式や同居、おそろいの指輪などではないか。婚姻届を出すことや、相手とのあいだに子どもをもつことも、そんなふうに、ふたりの関係を形にする方法のバリエーションだとも考えられる。

へつがい⑤女×女婚の小野さんは、結婚式を挙げることで「すぐく前に進めた気がした」と語っていた。日本ではまだ、同性カップルは法的な結婚をできないから、挙式はふたりの関係を目に見える形にする意味で、大きな役割を果たしたのだろう。

わたしにも、そういった「結婚的なこと」をしてみたい気持ちが、ないではない。



勝手に縛られているわたしたち——取材を終えて

この本の取材を始めてから、いまにいたるまで、ほんとうにたくさんが発見があった。インタビューのあいだだけでなく、取材の録音を聞き返して文字に起こすあいだ、それを何度も読み返すあいだ、さらに文章にまとめるあいだに、わたしのなかにあった結婚への思い込みは、少しずつ崩れていった。

取材の録音では、わたしが「うんうん」と軽く聞き流していた話も、あとで原稿を読み返したら、じつは相手がものすごく深いことを言っていて、なのにわたしがぜんぜん理解していなかったことに、気づいたりもしました。

語られた言葉を読み返すたび、いろんなものが見えてきた。

そういった、わたしのなかでの気づきは、ここまでの原稿のなかにも折り込んできたが、

収めきれなかった部分もある。それをここで少し、書いておきたい。

女が家事育児の役割を抱え込んでいる部分

いちばん考えさせられたのは、女であるわたしたち自身が「自分が家事育児の役割をせねば」と思っている、という部分だった。「せねば」というより、「したい」と思っている人も、実際多い。

今回わたしが話を聞かせてもらったのは、（有償の）仕事をもっている女性がほとんどだったのだが、それでもやはり「自分がそれをしなければ」と思っている。パートナーも女性である小野さん（つがい⑤ 女×女婚）や、一家の大黒柱である森澤さん（つがい⑥ 役割逆転婚）にさえ、そういう気持ちを感じられた。

わたしが「役割分担はどうしてますか？」とたずねると、彼女たちは一瞬、答えるのに躊躇する。最初は「なんでだろう？」とと思っていたのだが、話を聞いていくうちに、どうやらそれは「自分は家事育児を十分できていない」という、後ろめたさを感じているためだと気づいた。

常識や形にとらわれず、自由なつがい方を実践している人たちであっても、「女の役

割」には、まだずいぶん縛られている――。

そのことに気づいたとき、もどかしさが湧いた。

わたしは離婚した原因（の一部）も、まさに、そこにあったからだろう。この本の最初にも書いたとおり、わたしは勝手に「妻はこれをやらなければならない」と思い込み、自分を追い詰めてしまったところがあった。

もちろん世の中にはまだまだ、男が女に役割を押し付けている部分があるにせよ、でもじつは、女が自分から「女の役割」を抱え込んでいる部分も、かなり大きいんじゃないか。そして、それをやめるのは、意外と簡単なことではないのかもしれない。

そのことは、わたしのなかで、ひとつのテーマとして残った。

「役割分担」そのものが悪いわけではなかった

また、〈つがい**⑥** 役割逆転婚〉の森澤さんの話では、「役割分担」や、「シュフ」という立場についても考えさせられた。

わたしはずっと「役割分担」を、それ自体が悪いことであるかのように思っていた。夫婦の一方がお金を稼いで、他方が家事育児をするという分担そのものが問題だと感じてい

たのだ。そして、家事育児を担う「シユフ」は、いくら働いてもお金がもらえない、かわいそうな存在だとも思っていた。

わたしの親は、団塊よりやや上の世代だ。父がお金を稼ぎ、母が専業シユフをするという、典型的なサラリーマン家庭にわたしは育った。そんな両親を見ながら、「お父さんはお金を稼いでいるから『偉い』（ことになってる）けど、お母さんはお金を稼いでいないから、いろいろな我慢しなければいけない」と感じていたのだ。

わたしと同年代か、それより上の女性では、夫婦の「役割分担」や「シユフ」について、そんなふうに感じて育ってきた人が多いんじゃないだろうか。当時はそういった考え方が、世の空気として、存在していたように思う。

けれど、一般とは役割を逆転している森澤さん夫婦は、どうだろうか。ダンナさんはシユフをしているけれど、べつに不公平ではない。とてもいい関係だ。家事育児も重要な仕事であることを、おたがい理解したうえで役割を分担していれば、なにも問題はなかったのだ。

悪いのは役割分担そのものではなく、「役割が選べなかったこと」なのだろう。わたしの親の世代の女性には、結婚してシユフになるという選択肢以外、ないようなものだった。

それが問題だったのであって、べつに夫婦で役割を分担することそれ自体に、罪があったわけではなかったのだ。

そんなことにも、いままさながら気づかされた。

快適に生きられれば、結婚しなくてもいい

だんだんと考えが変わってきた部分もある。

わたしはかつて、「いまの恋人とどうしたらうまく結婚できるのか、どんなふうにすれば、いっしょにうまく暮らしていけるのか」ということを考えていた。

けれど、だんだんと「べつにいっしょに暮らさなくても、夫婦であるという気持ちさえもっていればいいじゃない」と思うようになり、しまいには「べつに夫婦じゃなくてもいいじゃない」と思うようになった。

いろんな人の話を聞いているうちに、わたしにとつての幸せ、つまりわたしが必要としているのは、「自分が快適に生きること」であって、それはかならずしも、彼と「結婚」しなくても、いっしょに暮らさなくても、実現できていると気づいたのだ。

いまのような恋人同士という形でも、わたしたちはおたがいを必要として支えあってい

るんだから、それで十分ではないか。

もしひとりでも快適に生きていけるのであれば、つがわなくなってもいい。あるいは、かならずしもつがわなくても、ひとりで快適に生きていける人だっているだろう。支えあう相手は、恋人じゃなくなつてよくて、友だちでもいいし、きょうだい、親子でもいい。そんなふうにも思うようになった。

若いころにわたしは、姓名判断の本をみて、自分の名前を占ってみたことがある。総画数は「大吉」と出たが、「ただし、女性の場合は結婚で幸せになれない」と添えられていた。「結婚で幸せになれない」って、ようするに「幸せになれない」ってこと？　そういうわれた気がして、ショックだった。

でもいまはもう、気にならない。いま、わたしは結婚していいけれど、幸せだと思っているから。

いろんな結婚の形がわかる本

- 『オトナ婚 私だけの自由な結婚のカタチ』しばぎとしえ、エンターブレイン
- 『カマかけたらクロでした』うえみあゆみ、メディアファクトリー
- 『事実婚は私の幸せのカタチ』白井明子、文芸社
- 『同性パートナー』赤杉康信・土屋ゆき・筒井真樹子、社会批評社
- 『二人で生きる技術』大塚隆史、ポット出版
- 『子連れ再婚を考えたときに読む本』新川てるえ、太郎次郎社エディタス
- 『事実婚 新しい愛の形』渡辺淳一、集英社新書
- 『卒婚のススメ』杉山由美子、オレンジページ
- 『夫婦崩壊!』亀山早苗、WAVE出版
- 『ママより女』ドラ・トーマン、小学館
- 『別居したら夫を好きになれました』安斎かなえ、竹書房
- 『結婚の起源』ヘレン・E・フィッシャー、どうぶつ社
- 『愛はなぜ終わるのか』ヘレン・E・フィッシャー、草思社
- 『性と結婚の民族学』和田正平、同朋社
- 『家族を超える社会学』牟田和恵(編)、新曜社
- 『近代家族の成立と終焉』上野千鶴子、岩波書店
- 『結婚はオートクチュール』中村うさぎ、フィールドワイ

著者略歴

大塚玲子

おおつか れいこ

一九七一年生まれ、東京女子大学文理学部社会学科卒業。

都内の編集プロダクションや出版社に勤めたのち、妊娠を機にフリーとなる。

以来、編集者、ライターとして、書籍やムックの企画・編集・執筆などをおこない、離婚・結婚や、子ども、家族をテーマにした仕事を多く手がける。

O H事務所 <http://homepage3.nifty.com/ohj/>